

# 西田 譲

日本維新の会 / 衆議院議員

国民精神の健全性や高貴性を取り戻さないと、  
この国は滅びる



# 田野瀬 太道

自由民主党 / 衆議院議員

日本はまだまだ大丈夫です。  
絶対に未来は明るいはず

2012年、年の瀬に行われた衆議院議員選挙は、59・3%という戦後最低の投票率で、自民党が大勝した。同選挙で、日本維新の会に所属し、地縁のない選挙区から国政進出に挑戦した西田譲。自民党から、父の地盤を継いで出馬した田野瀬太道。秘書時代から交流があるという二人は、共に初当選を果たした。未来の日本を担う若き新人議員が、解決すべき震災復興、教育、少子化などの問題と、未来を語る。

## 自民党と維新の会、それぞれの選挙戦

――お二人が初当選となった昨年の総選挙は、どのように戦われたんですか？

**田野瀬**「私は父親の代からずっとやっていたことですが、選挙運動期間の前から『選挙に行きましよう』というチラシを撒くことをやりました。実現は難しいですが、私は投票を国民の義務にしたらいいと思っっているんです。仮に義務になったとしたら、今のように政策もわからない、誰かも知らない状態では白票を投じる人もいますよね。例えば、政治家は当選したとしても、自分の得票数よりも白票のほうが多かつたら、もっと何かを伝える努力もせなあかんだろうって考えるでしょう。有権者も少しは政治を見るようになるでしょう。そういう感覚で、『白票でもいいから、行ってほしい。無記名も意志ですよ』と」

――確かにそうですね。

**田野瀬**「だから今回も『私の政策も言いますけど、気に入らんかったらほかの人に投じていただいても結構です』と、とにかく選挙に行ってください」という訴えをしましたね」

**西田**「日本維新の会はできたばかりの政党なので、こちらからのアウトプットではなく、『有権者の気持ち、いかに受け止めるか』っていう感覚がありました。自民党だったら、おそらく『2009年の政権交代以降の経験を踏まえて、もう一度私たちにやらせてください』っていうアウトプット型だったと思うんですけど。私の場合は、有権者の方の『お前ら、大丈夫か？』っていう期

待と不安、射るような気持ちや眼差しに伝えられるかという、受け身の選挙だったような気がします。そこに応えられなかったから、小選挙区の票が伸びなかったのではないかと思っています」――なるほど。

**西田**「実は、私はあまり投票率を上げなきゃとは思ってないんですよ。選挙に行かないことも含めて、有権者の意志です。その意志は意志として受け止めて、私は自分のやりたい政治をやっているっていうスタンスです」

――どういうことでしょうか。  
**西田**「選挙と政治は別ものなんです。選挙は有権者と仲良くなることです。政治っていうのは仮に有権者から恨まれても、『ごめんさい。でも、これをやらなければ日本のためにならないんですよ』と言わなければいけない。今の政治は有権者にそれが言えなくなっちゃってしまっている」

復興には、強い国民精神が不可欠

――選挙の争点のひとつでもあった原発に関して、自民も維新の会も『申し訳ないけど、日本のためにはやらなければいけない』という考えなのではないか。

**西田**「簡単に言うと、私は原発をゼロにはできないと思っています」

――できないんですか？ それとも、したくないんですか？

**西田**「そこは分かれるんですよ。私はやらなければいけないと思います」

**田野瀬**「私は個人的な意見を言えば、原発抜きでエネルギーは当然なだろうな、という考えです。飛躍的な技術革新がない限り、原発ゼロは非現実的かなと思いますね」

――安全性向上とは言いますが、万が一、事故が起きた場合は、長い間、人が住めなくなってしまう。そのリスクを考えると？

**西田**「はい。推進です」

**田野瀬**「私もです」

**西田**「間違いのものは、原発が『100%安全』といって進められてきたこと。そのため、事故が

起こった時の対応をまったく決めていなかった。賠償の問題もそうですし。どう対処するか、わかりやすく言うと避難訓練ですね。そのような体制をぜんぜん取ってなかった。しつかり反省しなきゃいけないところはありますが、原発をやめましようという話では決まらないと思います」

**田野瀬**「私もほぼ同じですね。欠落していた部分を補い、専門家が安全だとお墨付きがつくような施設は稼働していかないと、エネルギー的には暗い未来が待っていると思います」

**西田**「科学に対して、きちんと尊重する気持ちを持たなきゃダメですよ。感情で物事は動きがちです。原発の問題もですし、選挙も近いかもしれない。選挙は感情がぶつかり合うものですけど、政治は感情で動いてしまうと、それこそ日本がなくなっちゃいますよ」

――日本は広島、長崎に原発が投下され、福島での原発事故もありました。これだけのことがあると、感情的になるのも当たり前なのではないかと思うんです。

**西田**「広島、長崎には原発が落ちた翌日から専門家が入り『この地を何とか立て直すんだ』と頑張った。だから復興したんです。そこにあるのは『原発は嫌だ』という感情じゃなくて、『苦難を乗り越えよう』という強い意志、強い国民精神なんです。福島は立ち入りも禁止して、なかったことにしようという感じですよ。事故を乗り越えようという意志が、あまり感じられない。国民精神が弱すぎるんですよ」

**田野瀬**「私は、感情的になるのはわかります。だけど、少なからず感情に流されることをなくしていかないと、という面はある。流れに棹差してでも言わないといけないと思っています」

**西田**「冷静にこの事故を乗り越えないと」

**田野瀬**「東北の復興に向けてね。『不可能の反対語は可能じゃない。チャレンジだ』って、大リーグ初の黒人選手ジャッキー・ロビンソンの言葉がありましたね」

**西田**「いい言葉ですよ」  
**田野瀬**「前を向いて挑戦していきたいですね」

**西田**「脅威を脅威として見るには、知識と勇気と倫理が必要です。そこをちゃんと見られない政治家は、知識がないか、勇気がないか、倫理観が乏しいかです」――市民は知識だ、勇気だ、倫理だと言っている余裕がないのも事実です。

**西田**「だから、政治家にこそ求められる。みんながそんなことを考えたら、窮屈でしょうがないですから」――確かにそうですが、すべてを政治家任せでは後ろめたい部分もあります。

**田野瀬**「後ろめたいと思わなくていいんですよ。自分の生活をきちんと営むことを頑張らなくてはいけない状況ですから。国家全体をどうするか考えるほど、暇な国じゃないんです」  
**西田**「毎日みんな一所懸命に働いている。自分のこと、家族のことで精一杯ですから。それが現実だと思います。だから政治家がしっかりしなきゃいけない」

――**田野瀬**さんは、未来は明るいと思いますか？  
**田野瀬**「日本はまだまだ大丈夫ですよ。そうしていかないといけない、という使命感もありますし。絶対にええ国にしないといけないっていう想いで、沈没に向かって政治家せなあかんのか……」なんて、絶対に思っけません。私は楽観主義者なんです。絶対に未来は明るいはずや、と思っ

ちゃってます」――**明るい**と信じて。  
**田野瀬**「信じて任せてください」  
**西田**「信じていただくには、人間性が重要ですよ。日本の良いところって、一定の依存心があるところだと思っんです。だから團結できる」  
**田野瀬**「委託精神ですよ」

**西田**「東日本大震災の復興の時も、自分を差し置いてでも近所の人や町の人、見ず知らずの人に手を差し伸べようとしたわけじゃないですか。依存心と背中合わせですけど、非常に良いところだと思います。『自分さえ良ければ』『今さえ良ければ』っていう風潮が蔓延してしまっただけど、日本人が持っている良さが見えましたね」

若手議員の使命は、政治家が逃げていた問題と向き合うこと

――お二人は国会議員として、日本の未来のために何にチャレンジしますか？

**田野瀬**「国を挙げてやるべきは、経済復活と震災復興。自民党としては、自主憲法制定。ですから、そこに向けてのアクションですね。個人としては、財政と教育ですね。使い古された言葉ですけど、国作りは人作りやと思っっていますから。日本の人口は約1億300万。仮に今後減ったとしても、2人分、3人分の質の高い国民がいれば外国と勝負できるわけです。そのためには教育しかないと思っっていますね」

**西田**「教育はすごく大事ですね。今の日本を見た時に、ローマ帝国の滅亡にそっくりなんです。ローマの滅亡は、パンとサーカスで国民が墮落した結果です。国からパンが貰えるから、働かなくても飯が食える。サーカスの実施によって享楽に溺れる。健全な国民精神をなくした結果、国防すら奴隷に任せていたわけです。自分たちで国を守るという、健全な精神がなかった。今の日本は、ローマが減びた時によく似ている。国民精神の健全性や高貴性を取り戻さないと、この国は滅びると思うんです。そこをどうにかするには、教育が大いに役割を果たすと思います」

**田野瀬**「教育以外に西田さんが取り組むのは？」  
**西田**「やるべきことは本当にたくさんあります。例えば、出生率のこと」  
**田野瀬**「ええ。少子化、人口減少はひとつの大きい問題だと思っますね。どう斬り込んでいくんですか？」

**西田**「今、日本では1年間におよそ100万人の子供が生まれています。対して、人工妊娠中絶の数は、公式発表で20万件。公式ではないものも考えたら、もっと多いと思いますが、100万人が生まれる一方で、少なくとも20万件の墮胎があるわけです。人として、倫理が退廃している。これは、俺たち政治家の使命です。今までの日本の政治はそうした際どいことを議論するのを避けてき

**田野瀬**「この国はまだまだ捨てたもんじゃありません」――僕も僥越ながら物怖じしないお二人を見ていて、日本の政治家も捨てたもんじゃなないなと思いました。今後でもできれば政党政治に染まらずに、過激にお願いします(笑)。

**西田**「ご心配なく(笑)。今後、維新の会が結党時に共有した自立という価値観をないがしろにするような政党になったら、私はぶっ壊しますから」――**田野瀬**さんは「今後、こういう自民党になったらぶっ壊す！」っていうことはありますか？

**田野瀬**「言ってることとやってることが違う、約束を守られへん党になったら自民党もダメですね。ぶっ壊さないとけない」  
**西田**「でも、私から見ていると田野瀬さんのいいところは、絶対に壊さないってことかもしれないと思うんです。自民党を未来永劫守り続けることこそ、田野瀬さんの使命……かもしれない」

**田野瀬**「そう信じて今、自民党で頑張っっていますから」  
**西田**「党は違いますが、安倍総理が言う『頑張った人が報われる社会』にしたい気持ちは、私も一緒ですよ」

――最後に、日本の明るい未来のために僕らはどうしたらいいのか。言っずついただけますか？  
**西田**「元氣な内は、とことん働け！」

**田野瀬**「私は『選挙に行け！』ですよ」

ていましたが、特に私たちの世代の政治家は向き合わなくてはいけないと思っますね。墮胎は殺人じゃないのか。命はどこから始まるのか。倫理的なところに政治は入っていかなきゃいけない」

**田野瀬**「生命のことを棚上げした議論が横行しているのは、事実ですよ」  
**西田**「母体保護法では、例えば、暴行によって墮胎してしまった場合や、身体的、経済的に母体に危険が及ぶ場合に墮胎が認められています。しかし、完全に形骸化していて簡単に『産む』か『堕ろす』という議論になってる。命に対して、あまりにも無頓着すぎると思うんです。その議論をなしにして、出生率を上げましようとか、子育て支援のことなど議論がされていますが、それ以前の話ですよ」

――どうすればいいと思っますか？  
**西田**「逃げないことですね。我々のような初当選組や、若手の政治家としていちばん気をつけたいといけないのは、今までの政治家が逃げて来たことから逃げないこと。そのひとつが命について考えることだと思っます。選挙の争点になっってもいぐらいい議論です。アメリカの選挙では、必ず中絶の是非が問われますよね」

**田野瀬**「そうですね」  
**西田**「そこに向き合うことによって、今のパーゼンセルのような選挙じゃなくなります。国民は、国の政策に頼りすぎています。つまり国民の墮落です。先ほどお話ししたローマ帝国の滅亡と同じ、パンとサーカスによる国民の墮落なんです。国民が悪いわけはありません。政治の責任なんです」――そこに政治家が向き合っべきだと？

**西田**「そうしないとこの国はよくならない。国防だっって同じです。仮に国を守らなきゃいけないという事態になった時、他人任せの意識を持たないことが大切です。何も交代で飛んでいっけてわけじゃなく、『この国は、自分たちで守らなないとけない』っっていう意識ですね。制度を変えればよくなるという問題ではありません」

**田野瀬**「確かに、総制度顧み化してはいますね」  
**西田**「大学に何年浪人しても合格できない人は、

待と不安、射るような気持ちや眼差しに伝えられるかという、受け身の選挙だったような気がします。そこに応えられなかったから、小選挙区の票が伸びなかったのではないかと思っています」――なるほど。

**西田**「実は、私はあまり投票率を上げなきゃとは思ってないんですよ。選挙に行かないことも含めて、有権者の意志です。その意志は意志として受け止めて、私は自分のやりたい政治をやっているっていうスタンスです」

復興には、強い国民精神が不可欠

――選挙の争点のひとつでもあった原発に関して、自民も維新の会も『申し訳ないけど、日本のためにはやらなければいけない』という考えなのではないか。

**西田**「簡単に言うと、私は原発をゼロにはできないと思っています」

――できないんですか？ それとも、したくないんですか？

**西田**「そこは分かれるんですよ。私はやらなければいけないと思います」

**田野瀬**「私もです」

**西田**「間違いのものは、原発が『100%安全』といって進められてきたこと。そのため、事故が

**YUZURU NISHIDA**  
西田 譲 ○1975年、熊本県生まれ。衆議院議員。慶応義塾大学経済学部中退。衆議院議員公設秘書を経て、07年、千葉県議会議員に初当選。自民党所属。10年、八千代市長選挙に出馬のため、離党。12年、衆議院議員総選挙で日本維新の会から出馬し、比例南関東ブロックで当選。ww.w.55nishida.com

**TAIDO TANOSE**  
田野瀬太道 ○1974年、奈良県生まれ。衆議院議員。早稲田大学第二文学部卒業。97年より衆議院議員 田野瀬良太郎の秘書を務める。12年、衆議院議員総選挙では父親の地盤を引き継ぎ、奈良4区で自由民主党から出馬、初当選を果たす。www.tanose.com